



Le Fils 息子

作：フロリアン・ゼレール 翻訳：齋藤敦子 演出：ラディスラス・ショラー

Le fils

強烈な傷みをともなう リアルすぎる家族の悲劇

絶賛された「Le Père 父」の作・演出コンビによるさらなる衝撃作を、
初演のバリではかなわなかった実の父子俳優で実現。

2019年にシアターイーストで上演された「Le Père 父」は、認知症を発症した父の目線で家族や周囲との関係を描くという、フランスの作家・劇作家フロリアン・ゼレールのユニークな発想が冴える佳品だった。日本公演は、パリの初演でも演出を手がけ、ゼレールから全幅の信頼を寄せられているラディスラス・ショラーが担当。父としての威厳や頑なさ、その狭間から覗く心細さをチャーミングに演じた橋爪功は絶賛され、娘役の若村麻由美も、制御不能な父に戸惑い消耗してゆく姿を切実に演じて、観客の共感を集めた。2020年、作者のゼレールはこの作品を自ら監督して「ファーザー」というタイトルで映画化。今年4月に発表されたアカデ

ミー賞では、父役を演じたアンソニー・ホプキンスが主演男優賞、ゼレールが脚色賞を受賞している。

この、いまや映画界でも時の人となっているゼレールが、最初に書いた「La Mère 母」、続く「Le Père 父」と併せて「家族三部作」の最終作として書いたのが「Le Fils 息子」だ。2018年にショラーの演出によりパリで初演の後、世界13か国で上演され、大きな反響を呼んでいる。両親の離婚で傷ついた17歳の少年ニコラは、同居する母と折り合わず、再婚した父ピエールの新家庭に身を寄せる。が、息子と真剣に向き合おうとする父との間で軋轢を繰り返し、状況は悪化の一途をたどってゆく……。

「ゼレール作品の中で、『Le Fils 息子』はもっともリアリズム色が鮮明だと思います。『Le Père 父』のようにシュールな場面が錯綜することはほとんどなく、展開はいたって具体的かつ現実的。観客はニコラという少年に不安を覚えたり、愛着を抱いたり、危険を感じたりしながら、つねに感情をかき乱されます。その意味では、先が読めないサイコスリラーのような作品ですね」と、「Le Père 父」に続いて日本でも演出を担うショラーは言う。再婚し、若い妻と生まれたばかりの幼子と仕事のことで頭がいっぱいの父ピエールの前に現れる、思春期の息子ニコラ。ピエールはいい父親であろうとしてニコラに強権的な態度を取り、反発を買ってより溝を深めてしまう。互いの心の間に踏み込む父子の生々しい争いは凄絶を極めるが、パリでの初演の際にゼレールとショラーは、この両者の関係をよりインパクトあるものとするために、実の父子である俳優をキャストिंगすることを考えたが、果たせなかったようだ。それが今回、日本で実現する。俳優として今まさに円熟期を迎えた岡本健一と、アメリカの演劇学校を卒業後に帰国し、俳優として新たなスタートを切ったばかりの岡本圭人。作品設定とも重なる実父子による上演についてショラーは、

「確かに傷みをともなう真実がむき出しになる点はリスクですが、この役を引き受けてくださった時点で、2人とも覚悟はできているはず。私は俳優を信頼しているので大丈夫です」とにこやかだ。強烈な傷みをともなう物語の展開に覚悟が必要なのは、観客のほうかもしれない。

取材・文（コラムも）：伊達なつめ（演劇ジャーナリスト）

WRITTEN BY
FLORIAN ZELLER



photo by Laurent Hini

フロリアン・ゼレール | 作 |

1979年生。フランスの小説家、世界で最も上演されているフランスの現代の劇作家。「La Mère 母」「Le Père 父」と続いた家族三部作を締めくくる「Le Fils 息子」は、2018年にパリ・シャンゼリゼ劇場で初演され、フランス本国のみならず世界中で上演されている。初の映画監督作品となる「Le Père 父」を映画化した「ファーザー」では、アカデミー賞「脚色賞」を受賞。この夏、ヒュー・ジャックマン主演で「Le Fils 息子」を映画化し、監督することが発表されている。

DIRECTED BY
LADISLAS CHOLLAT



photo by Francois Rolleants

ラディスラス・ショラー | 演出 |

1975年生。今フランスで最も勢いのある若手演出家の一人。古典から現代劇まで幅広い作品を手掛ける。フロリアン・ゼレール作「Le Père 父」は、モリエール賞など数々の賞を受賞して高い評価を得た。2019年には、東京芸術劇場で「Le Père 父」を演出し、読売演劇大賞・優秀作品賞を受賞、橋爪功が読売演劇大賞・最優秀男優賞を、若村麻由美が優秀女優賞を受賞した。2018年には、ゼレールの最新作「Le Fils 息子」をパリで演出し、モリエール賞6部門へのノミネートと最優秀新人賞を受賞した。今回の日本での上演は、東京芸術劇場との企画第2弾となる。

舞台でも映画でも強固な信頼関係——ゼレールとショラー

自身の戯曲「Le Père 父」を映画化した「ファーザー」で初の長編映画の監督に挑戦したフロリアン・ゼレール。斬新な構想の脚本と、アンソニー・ホプキンスに主演男優賞をもたらした監督としての手腕により、映画界でも俄然注目を浴び、現在はヒュー・ジャックマン主演による「Le Fils 息子」の映画化に取り組んでいる。そのキャストिंग

についてはラディスラス・ショラーも助言を求められたとのことだ。ショラーによると、ゼレールとはキャストिंगに対する意見交換はたくさんするが、キャストिंगが済んだら、口を挟まず演出家に自由を与えてくれるタイプの作家であり、そうしたゼレールの演出家への全幅の信頼により良い関係が築けているという。

8月30日(日)～9月12日(日) プレイハウス 詳細はP10へ

作：フロリアン・ゼレール
翻訳：齋藤敦子
演出：ラディスラス・ショラー
出演：岡本圭人 若村麻由美 伊勢佳世 浜田信也 木山廉彬 岡本健一

北九州、高知、能登、新潟、宮崎、松本、兵庫を巡演 公式サイト <https://www.lefils-theatre.jp/>

